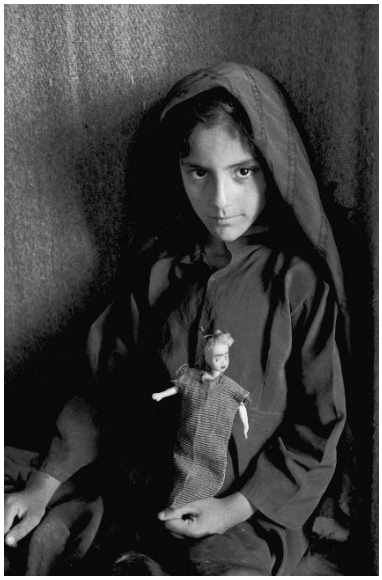
ミュゼふくおか カメラ館
FUKUOKA CAMERA MUSEUM

ミュゼふくおかカメラ館　夏の企画写真展リリース／実施概要

清水ツル子の被爆した指（広島　1984 年）



パグリ（9歳）（アフガニスタン　2002年）

大石芳野写真展 「 戦世（いくさよ）をこえて 」

戦争後を見つめるドキュメンタリーを手がけ、約半世紀にわたりベトナム、カンボジア、アウシュビッツ、そして広島、長崎、沖縄・・・など、とりわけ戦争の悲劇に襲われた地の撮影を続ける写真家・大石芳野。その取材はベトナム戦争後に子ども時代を送った人、治療を続ける広島、長崎の被爆者など、彼らの表情に眼差しとレンズを向け、いつも寄り添います。現場の記憶を紡ぐごとく、精力的に取材し撮影してきた作品群は共通して「終わらない戦争」という強いメッセージを私たちに届けます。この夏、写真家・大石芳野がこれまで発表してきた渾身のシリーズを一堂に展示し、戦争とは何か、平和とは何かを問いかけます。

＜大石芳野プロフィール＞

東京都出身。日本大学藝術学部写真学科卒。2004 年世界平和アピール七人委員会委員。現在の研究課題は、『フォトジャーナリズムの変遷と動向』・『フォトジャーナリズムから見た戦争と平和における民衆』。人々の生活が戦争や紛争で妨げられて命を奪われている惨状を世界に伝えている。著作に「沖縄に活きる」「沖縄　若夏の記憶」「それでも笑みを」「HIROSHIMA 半世紀の肖像」「カンボジア苦界転生」「ベトナム凜と」「夜と霧は今」「子ども戦世のなかで」「隠岐の国」「福島 FUKUSHIMA　土と生きる」「戦争は終わっても終わらない」「戦禍の記憶」「長崎の痕」、最新書「わたしの心のレンズ　現場の記憶を紡ぐ」（2022 年）他。日本写真協会年度賞（1982 年）、芸術選奨新人賞（1994 年）、土門拳賞（2001 年）、紫綬褒章（2007 年）、日藝賞（2008 年）を受賞。

会　　期　　令和5年6月17日（土）～8月20日（日）≪月曜休館／祝日の場合は翌日≫ 56日間
開館時間　　9:00～17:00（入館は 16:30 まで）
主　　催　　ミュゼふくおかカメラ館（公益財団法人高岡市民文化振興事業団）
共　　催　　高岡市、高岡市教育委員会、北日本新聞社
協　　力　　富山県写真連盟、富山大空襲を語り継ぐ会
入 館 料　　一般800円、高校・大学生400円、中学生以下無料
　　年間パスポート3，000円

＜大石芳野オープニングギャラリートーク＞　① 6月17日（土）14:00～／カメラ館
＜大石芳野ギャラリートーク ＆ トークショー＞ ② 7月予定
＊トークショー「戦争は終わらない」高校生の皆さんへ　7月予定
＜関連催事＞お話会：8月5日（土）14:00～／コンサート：8月13日（日）14:00～
＊「あの日の空」 お話／佐藤　進さん（富山大空襲を語り継ぐ会）
＊「レクイエム」平和への祈り／お話・演奏：トロイ・グーギンズさん（ヴァイオリン／OEK）

カンボジア（タイ難民キャンプ　1980 年）

≪カメラ常設展　同時開催≫コレクション展Ⅰ「WAR and CAMERA　200」 令和5年6月17日（土）～
～戦中戦後のカメラたち～

戦争はとうに終わっているはずなのに、実はまだ終わっていないのである―

今、ウクライナ全土が戦場となり大勢の死傷者や難民が続出し、映像などを通して私たちは直面しています。砲撃に晒される恐怖の姿に目を覆いたくなるその姿は、78年前に終わった世界大戦、その後のベトナム戦争などにも重なります。過ぎ去った戦争から誰もが逃れられず、心身に深い傷を抱えたままです。政治の暴力である戦争に蹂躙された人びとの戦争は終わらない現実を写真で伝えたい、共有していただきたい、という思いで私は半世紀近く走り回ってきました。写真と向き合い、対話しながらご覧いただきたく思っています。――　写真家・大石芳野

○戦争は終わっても終わらない　広島、長崎、東京大空襲、沖縄

―戦争は終わっても終わらない。そう強く感じたのは 40 年以上も前になる。東南アジアを訪れた時に知った、日本軍の残虐行為を訴える人々の真剣な表情に直面した時だった。若い私には「日本軍に家を焼かれた」「家族も村人も殺された」という言葉を信じられなかった。戦争は終わり、私たちは戦後教育のなかで伸び伸びと育っていたけれど、同じ時代を、彼らは日本を恨みながら生きてきたのだった。――「取材ノート」より

（左）石井四郎軍医中将の「七三一部隊」が使用していた実験、研究器の器具の数々には、こぼりついた薬品も残っている。（中国　ピンファン　1992 年）

○長崎の痕　きずあと

―15 歳の弟の眞夫が着ていた学生服を箪笥から取り出して広げて見せてくれた。学生服には下宿していた彼が自分で繕った糸の痕がある。ゲートルもある。父親にゲートルの巻き方を教えてもらい「うまくできるな」と褒められた弟は嬉しそうに微笑んでいた。「その横顔も忘れられない」と涙ぐむ。（指方和子 1928 年 11 月生）・・・・自分たちのような痕を遺す戦争を、もう誰にも体験させたくない。お会いした一人ひとりのそうした声が、今も木魂のように響いてくる。―あとがき「遺族の悲しみ」より

（右）被爆のマリア。高さ約 25cm、幅約 16cm の頭部が浦上天主堂の瓦礫の中で見つかった。ムリーリョの「無原罪の御宿り」をモデルにしたと伝えられる。

（左）黒川幸子　1936 年3月生

松山町の爆心地に最も近い一帯には訳 300 軒、1860 人が住んでいたが、生還したのは 9 歳の少女ただ一人だろうと言われている。それが松山国民学校 4 年生の黒川幸子だ。彼女は町内会が造った防空壕（爆心地から 150m）の入口辺りで直撃を受けた。

○子ども 戦世のなかで　アフガニスタン、カンボジア、コソボ、スーダン、ラオス

「戦世」―戦乱期や戦後を生き延びるための闘いの日々を、沖縄では島言葉で「戦世」（いくさゆ）と呼ぶ。大石は国家間や民族間の争い、恐怖政治、放射能汚染、災害、またそれらが残した負の遺産に苦しむ世の中は「戦世」（いくさよ）だと言う。そしてその中で一番の犠牲者は子どもたちだと訴える。1980 年代から現在に至る世界各地の子どもたちの瞳を正面からとらえた眼差しは、躊躇なく私たちの胸の奥深くまで問いかけてくる。

（右）モン族のスーユータン（6歳）　ベトナム戦争当時、国民一人に 1 トンも投下された爆弾の一部が＜不発弾＞と化して、30 年以上を経た現在もラオスの人びとの日常を脅かしている。

○夜と霧は今 ―ホロコースト―　アウシュビッツ強制収容所

囚人の毛髪で作った毛布。囚人の脂肪で作られた石鹸。人骨と人灰の山。フェノール液の注射器。ナチスの医師はこれを囚人の心臓に突き刺して、殺害した。人間の尊厳が失われた極限の生と死を、大石は私たちの目の前に深い悲しみとともに届け続ける。

（左）強制収容所の「死の門」と呼ばれた SS（ナチス親衛隊）の中央衛兵所が前方正面に見え、その背後にはオシヴェンチム村がある。（アウシュビッツ　ビルケナウ　1987 年）

○ウクライナ／チェルノブイリ

（左）4号炉の爆発と炎上で一帯は被爆し瓦礫と化したため、コンクリートで覆われた。だが、作業員たちがごみを捨ててゆく陥没した箇所からは強度の放射性物質が漏れていることがわかった。

（右）チェルノブイリの少年。「子どもは全員が病気です。健康そうに見えても表面だけ。風邪で一カ月も臥せる子が多い。事故以降、青白い肌の子がほとんど」小学校の教員は暗い表情で言った。リンパ腺異常、白血病、癌などが急増しているという。

＜関連イベント＞ いずれも参加無料（ただし入館料が必要です）／事前申込不要

◆ 「あの日の空」 8月5日（土）14：00～／お話／佐藤　進さん（富山大空襲を語り継ぐ会）

◆ コンサート「レクイエム」平和への祈り　8月13日（日）14：00～／お話・演奏／トロイ・グーギンズさん（ヴァイオリン）

＜トロイ・グーギンズさん（ヴァイオリン／OEK）　プロフィール＞

アメリカ・コロラド州デンバー市出身。クリーブランド音楽大学大学院卒業。山形交響楽団の招待演奏家として来日。1989年よりオーケストラ・アンサンブル金沢第1ヴァイオリン奏者となる。OEK の活動、自身の小編成サロンコンサートなど年間 130 回以上の公演に出演。また、地域の子供達はじめ幅広い世代への音楽会を開催。後進の指導にも意欲的に取り組み、人とのつながりを大切にした音楽交流を広げている

◆ みんな集まれ！「クイズわくわくカメラカン！」 ＜夏休み期間＞7月22日（土）～8月31日（木）

コレクション展Ⅰ「WAR and CAMERA　2OO」 ～戦中戦後のカメラたち～の開催に合わせ、
小・中学生を対象にクイズラリーを開催します。参加者全員にカメラ館オリジナル缶バッジをプレゼント！